

ロマン

義勇隊の真実 満蒙開拓団の謎

日本は今から約七十年前、中国北部(当時の東北部)にある満州へ進出した。当時の日本は、満州を植民地化し、それを



満蒙開拓団の入植地

拠点に中国へ進出を計ろうとしていた。また、本土の人口を減らすと政府は考え、中学生ぐらいの生徒で長男以外の次男、三男に人隊する事をすすめ、訓練し、食料生産や軍隊の補助のため「満蒙開拓義勇軍」、「満蒙開拓青少年義勇軍」として満州へ送り出した。



満蒙開拓青少年義勇軍

元々は、志願制であったが戦局が悪化するにつれ強制的に入隊させられるようになった。終戦後、元義勇隊は松川村にも入り、信濃松川駅から東方面や、松川中学校近辺、とん

学校では、先生に一年もあれば土地も多くもらえるし、一人前の百姓になれると言われて入隊する人もいた。二〜三割の人々が満州で帰らぬ人になってしまふ悲惨な結果で終わり、義勇隊は終戦と同時に解散した。

「絶対によつてはならぬ。兄達が戦争の始めにフィリピンや満州で戦死し、とても貧しい生活を強いられ、切ない思いをした。今でこそ戦争のことが詳しく知れる時代な

ので絶対に繰り返して欲しくない。」と語った。当時の日本は軍国主義だったため、小学校で非戦争を言っていたのは千人に一人くらいという低い確率で現在では考えられない教育方針だったと言えらる。軍人になるために教育され、非戦争を唱える人は特別警察という憲兵とは違う組織が取り締まった。

祖父ヶ塚古墳、村の宝

祖父ヶ塚古墳は昭和五八年一月五日に、松川村指定文化財に指定された神戸原扇状地南傾斜扇端近く鼠穴集落の北、古墳時代後期六世紀末に構築された円墳



祖父ヶ塚古墳の外観

で、墳丘はやや円形で直径が一六メートル、高さ二・五メートルあり内部には横穴式石室がある。墳丘は南を向いて開口しており、石室は細長い



祖父ヶ塚古墳の中

り散りになって失われて、一部の玉類、銀環、頭椎、刀(かぶつちのたち)の装具一式などは、宮内庁の書陵部に所蔵されている。この古墳は当時、鼠穴集落

と考えられており、古墳の南側にはやはり盗掘の折の排土とみられる高まりが見られる。石室の開口部もかなり破壊されており、側壁や天井石、開塞と見られるものが、付近に散乱しているが全体としては保存のよい古墳といえる。鼠穴付近には祖父ヶ塚古墳のほかにも、現在ようやく残骸をとどめるに過ぎない「牛窪古墳」やまったく姿を消してしまつた「おかめ塚古墳」があったことがわかつている。その古墳と比べても「祖父ヶ塚古墳」はかなりの保存のよい古墳といえます。(松川村誌参照)

インタビューに応じてくださった浅原政雄氏(75)に戦争についてうかがったところ、

「ねずみがくれた贈り物」 ～今の村に至るまで～



鼠穴地区にある鼠石

この村には鼠穴という地区がある。この鼠穴には様々な地名の由来が語りが残されている。その中の一つにこの地区に存在する、鼠石についての物語がある。この石には小さな穴があいていて、その穴には「鼠」が住んでいたと言われる。

昔々、貧しい村人がいました。ある日、祭事がありました。そのためのまともな食器を持っていかなかったのです。岩の傍でそのことを嘆いていると、翌朝、穴の前に立派な食器がそろえてあったそうです。「これはきつと、穴に住んでいる鼠がそろえてくれたものにちがいない」村人は喜んで穴に向かって何度も手を合わせました。それを聞いた他の村人が頼んだときにも、翌朝、やっぱり食器がそろえて置いてあったのです。

村人達は大層ありがたがっていたのですが、とうとう、借りた食器の一部を壊した村人が、お詫もせず黙って返した(あるいは、借りたまま返さなかった)事件がおきました。それ以来、鼠が食器を貸してくれることは、二度とありませんでした。